

むかし、あつたそうな

むかし、薩摩の殿さまが、船で旅をしているときに、嵐にあつて、伊平屋島という小さな島に流れ着きました。村の入り口に貧しい家があつて、女と娘が住んでいました。殿さまは、その家に泊めてもらうことにしました。

やがて、七日のつもりが三月になりました。

ある日のこと、娘は、川で水をくみながら、

きようの風は

上(のぼ)り順風だけど

わたしに心うばわれて

月の三月

なるのも知らず

子どもをもらつて

あとはなんとしよう

と歌いました。

殿さまはそれを聞いて、いったいどういう意味かとたずねました。娘は、

「お腹に子どもができました」と答えました。殿さまは喜んで、

「わたしは、薩摩に帰らねばならないが、もし男の子が生まれたら、薩摩に連れてこい」といって、米俵三十俵をくれました。そして、かたみに九寸九分ユリ落としての脇差と、一丈二尺の槍を置いて、帰りの船に乗りました。

娘は、やがて、りっぱな男の子を生みました。すぐに薩摩の殿さまに手紙で知らせましたが、手紙は届きませんでした。

男の子は、七歳になりました。ある日、外で遊んでいると、子どもたちが、

「親のない子だ」といって、ばかにしました。男の子は家に帰って、母親に、

「おれの父さんはどこにいるの」とききました。

「おまえのお父さんは、薩摩の殿さまだ。おまえが十三歳になったら、ばあさまと

三人で、会いに行こう」

「十三まで待てないよ」

「じゃあ、あと三年待つておくれ」

やがて、三年たちました。男の子は、

「おれは、これから、ひとりで父さんをさがしに行つてくる」といいました。母親は、「じゃあ、きばつて行つておいで」といつて、旅のしたくをしてやりました。男の子は、りっぱな衣装を用意してもらいました。それから、百頭の馬から五十頭えらび、五十頭から三十頭えらび、三十頭から十頭えらび、十頭から五頭えらび、五頭から一頭えらびだし、りっぱな馬具をつけました。そして、九寸九分ユリ落としの脇差と、一丈二尺の槍を持つて馬にまたがり、伊平屋島の海岸を三度走らせました。それから、

「わが命、助けよ、馬」とさけんで、ひと鞭あてると、馬はうなずき、ふた鞭あてると海に飛びこみ、三鞭あてると、馬は、名護の浜に飛び渡りました。

男の子は、浜にいた女に、

りゅうきゅうおうじょう

「琉球王城へはどう行けばいいんでしょう」とききました。女は、

「さあ、知りませんねえ」といいました。

男の子は、先に進んでいきました。行くかい行くと、八十にもなるおじいさんに会いました。

「琉球王城へはどう行けばいいんでしょう」と聞くと、おじいさんは、

「ここから南に向かつて一日馬を走らせた所だよ」と教えてくれました。

男の子は、南に向かつて進んでいきました。すると、まわりが一里もある大きな竹山にやつて来ました。入つて行くと、よわい 十一歳のねこが出て来ました。男の子は、ねこを打ち殺して皮をはいで、着物をつくりました。

行くかい行くと、粟畑で、おじいさんとおばあさんが草取りをしていました。おじいさんが、男の子に、

「どこから来たのかね」とたずねました。

「伊平屋島からです。どこかに召使いを欲しがっているところはないでしょうか」と、男の子がたずねると、おじいさんは、

「琉球王城の王さまが、七人の馬の草刈りのうちひとりが死んだので、その代わりをさがしているよ」と教えてくれました。おばあさんは、

「神の子か天の子か知らないが、あんたみたいなりっぱな身なりの子どもを、召使いになんてやとつてくださらないだろうよ」といいました。男の子は、

「今はこんなかつこうをしているけれど、ほんとうは貧しい子どもなんだ。ぼくは、ねこのつらって名前だよ」といいました。

そこで、おじいさんは、琉球王城へ出かけて行って、王さまに、
「伊平屋島から、ねこのつらという子どもが来ております。召使いにしてやってください」とたのんでくれました。王さまは、

「連れてこい」といいました。

男の子は喜んで、馬を竹山の中にかくし、着物や槍や脇差を竹の節の中にかくしました。それから、ねこの皮を着て王さまのところに行きました。

王さまは、ねこのつらに、

「よく来た。おまえは、草刈りをせよ」といいました。ほかの草刈りたちは、ねこのつらを見て、

「こんなやつといっしょに仕事はできない」といいました。王さまは、

「だれでも、おまえたちのようにりっぱに生まれたいだろうが、運がなくてけものように生まれたものもいる。さあ、ねこのつらよ、草刈りに行け」といいました。

ねこのつらは、草を刈りに行きましたが、少し刈って、すぐにお城にもどって来ました。そして、

「手ばかり切って、わたしには、草は刈れません。庭はきをさせてください」といいました。ところが、表の庭をはかせるると、右の手に豆ができたといい、中庭をはかせる

と、
「左の手にも豆ができました。わたしには、庭はきもできません。七人がかりでする飯炊きをわたしひとりですさせてください」といいました。

七人の飯炊きたちはそれを聞いていきました。

「七人で炊いても朝飯は昼飯になり、昼飯は晩飯になり、晩飯は夜中になるのに。どうしてねこのつらひとりでするものか」

けれども、王さまは、

「するという者は、かならずするものである。させてみよ」といいました。ねこのつらは、

「さあ、飯炊きのみんな、きょうは、わたしのいうとおりにしてくれ。ひとりはあの土を持ってこい。ひとりは、わらを切りきざめ。ひとりは水をくめ。ふたりは、土とわら

を混ぜよ。それから、ひとりには、石を転がしてこい。ひとりには、混ぜた土を運べ」とい
いました。七人がそのとおりにすると、ねこのつらは、その土で、見る間に、大きなか
まどをつくりました。それは、火を燃やす口はひとつで、煮るところは七つ、そこに、
七つの大釜や羽釜をすえて、ご飯をたきました。あつという間にご飯が炊けて、夜が明
ければ「朝ご飯を召し上がれ」、昼になれば、「昼ご飯を召し上がれ」、夜になれば「夕
ご飯を召し上がれ」、というようになりました。王さまは喜んで、
「こんな良い召使いはいない。ねこのつらよ、いつまでもここにいてくれ」といいまし
た。

あるとき、王さまは、ねこのつらに、

「三月三日は、前の浜で三人の王が遊びをする。いつもより早く朝ご飯のしたくをせ
よ」といいました。その日になると、ねこのつらは、朝早く起きてご飯をつくりまし
た。王さまは、

「おまえも前の浜へ遊びに行かないか」といいました。ねこのつらは、

「人並みに生まれていれば、行きたくもありませんが、こんなかつこうでは、わたしが見
世物になってしまいます」といつてことわりました。

王さまが行ってしまうと、ねこのつらは、竹山にかくしておいた衣装を身につけ、
馬に飛び乗って、前の浜に行きました。そして、遊びの場の東側に立って、

「わが命、助けよ、馬」とさげんで、ひと鞭あてました。馬は、集まっていた人びとの
頭の上を飛び越えて、西側に降りました。王さまは、おどろいて、

「天の神さまが遊びを見に来られたのは、はじめてのことだ」といつて、立ち上がっ
て、おがみしました。けれども、王さまのひとり娘は、

「あれは、うちの召使いのねこのつらですよ」といいました。

ねこのつらは、急いで帰って、ねこの皮を着て、かまどの前に寝転んでいました。そ
こへ王さまが帰って来て、

「門を開けよ」といいましたが、ねこのつらは知らん顔をしていました。王さまがま
た、

「おい、ねこのつら」とよぶと、ねこのつらは、やっと起きて行って、

「今日は早起きしたので、眠っていて、失礼をしました」といいました。王さまは、ね
このつらに、

「今日は、天の神さまが遊びを見に来られたので、自分たちは立っておがんだのだ。おまえも行けばよかった。遊びは明日もあるから、明日はおまえも来い」といいました。

つぎの朝、ねこのつらは、昨日よりも早く朝ご飯をつくりました。王さまは、

「おまえも行かないか」とさそいましたが、ねこのつらは、

「そんなりっぱな神さまを、おがんでみたいとは思いますが、わたしは人間のかっこうをしていません。王さま、どうぞお出かけください」とことわりました。

ねこのつらは、王さまを送りだしてから、竹山にかくしっておいた衣装を身につけ、馬に乗ろうとしました。ところが、そこへ、王さまの娘と乳母が、忘れ物をしたといってもどつて来ました。しかたがないので、ねこのつらは、娘と乳母をいっしよに馬に乗せて行きました。そして、今度は、遊び場の西側に立って、

「今日わが命を助ければ、これで終わりだよ、馬」といって、ひと鞭あてました。馬は、人びとの頭の上を飛んで東側に降りました。王さまは、

「今日は、神さまは、母と妻をいっしよに連れて来られた。さあ、みな、立っておがめ」といって、みなでおがみました。ねこのつらはふたりを馬に乗せたまま帰って行きました。

家に帰ると、娘は、お腹が痛いといって、部屋に閉じこもってしまいました。ねこのつらは、かまどの前に寝転んでいました。そこへ、王さまが帰って来て、

「ねこのつら、門を開けよ」といいました。王さまは、中に入ってくると、

「今日は、神さまは、母と妻を連れて来られたので、自分たちは立っておがんだのだ」といいました。ねこのつらは、

「そうですか。わたしのようなのは、神さまをおがむこともできません」といいました。

さて、王さまの娘は、部屋に閉じこもったきりで、お城じゆうが大騒ぎになりました。お医者に診てもらいましたが、何の病気が分かりません。物知り女たちをあるだけ呼びましたが、やっぱり分かりません。ところが、お城の裏に住んでいる若い物知り女にたのむと、こういいました。

「おじようさまは、ご病気ではございません。お城の中に、おじようさまが慕っている召使いがおります。召使いだといってばかにすると、おじようさまは治りません。おじ

ようさまにお酒とさかずきを持たせてごらんさい。おじようさまがお酒をそいであげると結婚させれば、よくなりましょう」

お城の召使いたちは、自分ではないかと、思い思いに支度して娘の前に出ましたが、娘は見向きもしません。召使いたちは、ふざけて、

「ねこのつらはどこだ。おじようさんが、おまえを婿にするそうだ」といって、笑いました。ねこのつらは、いやだといって聞きません。

王さまは、ねこのつらに、自分の衣装をわたして、

「はずかしがることはない。これを着て行け」といいました。ねこのつらは、お風呂に入ってからだをきれいに洗うと、もらった衣装でからだをふいて外へ出て行きました。

そして、竹の節にかくしておいた衣装を着て、槍と脇差を身につけ、馬に乗ってもどつてきました。それを見て、みんなは、

「あれほどの若者に、ご飯をたかせて食べていたのか」といっておどろきました。王さまもおどろいて、

「わしは、娘より人を見る目がなかった」といいました。そして、

「どうか、わが家の婿になつてくれ」といいました。娘はみるみる元気になって、結婚のお祝いが行われました。お祝いは、三日三晩続きました。

四日目に、薩摩の殿さまから琉球の王さまに手紙が来ました。手紙には、

「あなたの娘をわが息子の嫁にしたい」と書かれていました。王さまは、

「娘には婿がいるから」とことわりの返事を出しました。けれども、薩摩の殿さまは、きかず、

「七日たったら琉球王城に行く。そして、その婿と勝負をして、娘をつれて行く」といつて来ました。

王さまは、ねこのつらに、

「息子よ、どうすればいいだろう」と相談しました。ねこのつらは、

「薩摩の殿さまは、わたしの父です。でも、このことは、黙っていてください。わたしが相手をお願いします」といいました。

七日たつと、薩摩の殿さまがやって来て、王城の門の前に立っていました。

「朱里王よ、朱里王。婿があるなら見せよ。見せなければ、娘はつれて行く」

ねこのつらは、杉戸のかげでじっと聞いていました。殿さまはまた、

「朱里王よ、朱里王。婿があるなら早く見せよ。見せなければ、おまえの首をとるぞ」といいました。

ねこのつらは、杉戸をけ破やぶって出て行くと、左ひざを立て右ひざをついていいました。

「薩摩の殿さまは、海であらしにあったことはなかったか」

殿さまが、

「あつたはず」というと、ねこのつらは、

「薩摩の殿さまは、伊平屋島に落とし子はなかったか」といいました。殿さまは、

「あつたはず」といいました。ねこのつらは、

「その子が琉球の王さまの婿になっている。今こそ、親子の勝負だ」といいました。

それを聞いて、薩摩の殿さまは、たいそうおどろいていました。

「悪わるかった。おまえの母が手紙をくれなかったので、知らなかったのだ。おまえの兄のために嫁をもらおうと思ってここへやってきたのだ。ゆるしてくれ。困こまったことがあれば、いつでもいつてくれ」

そういって、薩摩の国へ帰って行きました。それから、琉球の王さまと薩摩の殿さまは、兄弟のように仲なかよくたがいに助け合うようになりました。

やがて、ねこのつらは、琉球の王さまのあとをつぎました。それから、正月元日の王さまの使う水は、かならず伊平屋島でとることになりました。そして、師走しわすの水取みずとり南風なんふうといつて、二十四日と二十八日には、かならず南風が吹ふくそうです。

村上郁再話

資料『沖永良部島昔話集』関敬吾編／岩崎美術社